

- ①実際に授業をしてみて感じたことは、自分の意図を汲み取って学習してくれる生徒は少ないということだ。どのような意図で今この学習をしているのか、今日の目標は何なのかを明確に伝えなければ、こちらの意図とは異なる受け取り方をされてしまい、結果として学んでほしいことが伝わらないまま終わってしまうことがあった。そのため生徒に伝えたいことは、口頭だけでなく、スライドやプリントなどを活用して視覚的にも伝える必要があることを強く実感した。また自分の視点だけで授業を組み立てていては、生徒一人ひとりの理解度や学習の進度に差があるため、うまく伝わらないことも多くある。保健や体育の授業においても、学習が苦手な生徒がどのようなことができていないのか、どのような原因があるのかを把握し、その生徒が成長するために必要な工夫を考えることが、結果として全員にわかりやすい授業につながると感じた。特に体育の授業では個人の技量の差が出やすいため、学習目標は共通であっても、クラスやグループ単位で簡易なルールに変更するなどの配慮をすることで、全員が楽しめる授業にすることを意識した。体育の授業では、生徒が楽しくなりすぎて予測していなかった危険な行動をとってしまうことがある。そのような行動はすべて予測できるわけではないが、「なぜそのプレーが危険なのか」「どうしてその行動をしてはいけないのか」といった理由を明確に説明することで、生徒自身の意識も高まり、危険な行動は減っていったように感じる。
- ②生徒との交流の中では、授業だけの関係だと授業も反応が悪かったが、生徒との関わり合いをできるだけ増やしておこなった授業は、生徒の反応もよくなり、行いやすくなった。生徒との交流の中でお互いを知り、そして信頼関係が結ばれていくということを感じた。
- ③体育教官室での教員同士の会話の多く（約9割）は、生徒に関するものであった。先生方が生徒の顔写真とクラブ活動の情報などが記載されたファイルを手に取りながら、「この生徒は部活動では活発だけど、クラスではあまり発言しない」「この生徒はクラスを引っ張ってくれる存在だ」などと、生徒一人ひとりの特徴や様子を共有していたことが非常に印象的であった。私自身も生徒の顔写真と名前を見せてもらいながら、「この子は場面緘黙があるから、授業では発表させないようにしてね」と個別の配慮について教えていただいた。ホームルームのクラスには持病のある生徒もいて、「特別な配慮はいらないけど、よく様子を見ておいてね」と伝えられるなど、生徒の特性を教員全体で共有し、もしものときにはすぐに対応できる体制が整えられていることに感動した。また、「こんな授業をしたいけれど、どのような工夫をすればいいか」など、授業についての相談も日常的に行われており、生徒により良い学びを提供するために教員同士が真剣に話し合い、知恵を出し合っている様子が見受けられた。教官室の机には教材研究に使われた本や資料が多く並んでおり、ベテランの先生であっても「授業はいつも緊張感を持って臨んでいる

し、教材研究は欠かせない」と話していたことが心に残っている。同じ授業でも、生徒はそれぞれ異なり、だからこそ「一人ひとりに合った最適な授業」を提供しようと先生方が日々学び続けているのだということを強く実感した。

- ④教育実習を通して、教員という仕事のほんの一部に触れ、その大変さと同時に重要性について深く考えさせられる3週間となった。生徒の立場では「50分もある授業」と感じていた時間も教員の立場になると「50分しかない授業」になる。その限られた時間の中で、生徒に何をどのように伝えるのか、どうすれば分かりやすく学ばせることができるのかを真剣に考える日々であった。実習先の先生方からも「教員にとって何個かある授業のひとつでも、生徒にとっては一度きりの授業である。その一回に全力を注ぐことが大切だ」と繰り返し教わった。常に授業改善を意識し同じ内容であっても成長できるよう工夫を凝らす姿勢が求められているのだと実感した。また生徒一人ひとりにとって、担任の先生は「たった一人の先生」であるということも忘れてはいけないことである。たとえ実習生であっても生徒から見ると先生になるため、一人ひとりと真剣に向き合い、全力で支えることの大切さを学んだ。

この実習期間は、生徒の頃には気づくことのできなかった先生方の「授業にかける想い」や「生徒に対する深い愛情」に触れ、自分自身の教員像を見つめ直す貴重な時間となった。生徒が安全に自分らしく学校生活を送るために、その背景にある先生方の見えないサポートであったり連携を行う事が非常に重要である。授業を行う事だけが教員の仕事ではないため、学級経営や保護者対応など教員の仕事は多岐にわたっている。その中で、自分の実習のために時間をさいて指導してくれる先生方や生徒のためにも自分ができる全力を出しきる必要がある。授業準備のしすぎはないため、現状に満足するのではなく常に高みを目指して、教員という仕事に向き合わなければならない。